

本誌としては始めて本格的な「特集」を組んでみました。まだあまり世に知られていない「ニューアーバニズム」をご紹介しますという考えです。

20世紀はまさに「都市化と郊外化の世紀」でしたが、そのスタートにE・ハーワードの田園都市論があったわけです。産業革命によって引き起こされた「都市化」は過密で不衛生な都市労働者の居住環境を生み出しました。乱暴に言えばこれを革命によらずに解決しようとしたひとつの試みが「ピースフル・パス(平和な道)と副題された「トゥマロー」だったのです。」(「明日の田園都市」の初出本の題名がこれです)

21世紀に解決すべき都市居住のテーマは、もっと広くというような量的な問題ではないでしょう。CO₂の削減、ホルムアルデヒドなどの室内空気の問題、居住環境の改善など多くの課題があり、それらはわれわれの生活のスタイルとも大きく関わっています。

しかしニューアーバニズムが最も関心を持つのは、人間関係、居住環境を含む町のあり様であると思われます。アメリカでも問題になっている家庭崩壊、地域崩壊は人間のコミュニケーションの問題でもあります。過度な自動車への依存はCO₂としても問題ですが、自然環境から切り離され、密室の中で孤立している時間が長いこと自体がデイス・コミュニケーションとして問題だと言ったら言い過ぎでしょうか。彼らが歩ける町、歩いて楽しい町を目指すのは、明らかにエネルギー問題とコミュニケーション問題を意識したものです。

一昔前はTVが家庭の団欒を奪うことが問題視されました。パソコン、インターネット、携帯電話などあらゆるものがパーソナル化され、パチンコばかりではなく飲み屋ではカラオケという機械に遊んでもらっています。自販機もいたるところにあり、一日中生身の人間と会話をしなくても何不自由なく暮らせます。考えてみればこれは便利であると同時に恐ろしいことです。

短絡的かもしれませんが、誰でもオタクになれますし、すぐキレルようになるかもしれません。会話力の不足は「病理」と考えていいとも思います。

われわれも均質な町、単調な町は問題だと常々考えてきましたが、住宅宅地を安く大量に供給するという戦後的命題がいまだに拭いきれていません。また郊外住宅地の過度な用途純化もあまり問題にされていません。

いい町は住む人々によってしか完成されないとすれば計画の限界ということも意識しなければなりませんし、そもそも町は住みつがれながらつくり続けられるものであって、完成という概念も修正する必要があるようにも感じます。

さて特集ではDPZに対するインタビューという画期的な試みを実現しました。筑波大学の渡先生が正月5日、フロリダに飛んで会っていただいたものです。ニューアーバニズムの創始者、旗手とでもいうべきご夫妻ですが、見識の高さを感じさせられました。

今回は記事の内容はお読みいただくとして、今後の予告をさせていただきます。

来年は田園都市の第1号、レッチワースの100周年にあたりますが、現地のイギリスではこれを記念して盛大な会議を予定しているとのこと。そこでウエストミンスター大学に留学されレッチワースの研究に携われた神戸芸術工科大学の齋木崇人教授の肝入りで、そのプレ会議としてこの9月に日本会議を行なうことが予定されています(会場はつくばと神戸)。私どもの財団もこれに協賛することにはしていますが、この時期に合わせて次の44号はニューアーバニズム特集の第2弾として郊外住宅地問題を取り上げたいと考えています。

そして2002年3月発行予定の45号ではつくば、神戸会議のエッセンスを「レッチワースから学ぶもの」(仮題)として特集してみたいと考えています。

本誌の記事あるいは企画内容について読者からのご意見をお寄せいただければ幸いです。

(大川)